

狸 1 1 鍬に化けた狸 = = = 猪・鹿・狸より

自分がまだ五つ六つの頃だった。街道端に茶店を出していた一人者の婆さんがある雨の降る晩、追分から家へ帰る途中、北山御料林下の土橋から、下の谷へ転がり落ちて死んだことがある。何でもおきよ婆さんとか言って、相当小金も貯めていたと言う話だった。傘を差したまま死んでいたそうである。狐が突き落とししたと言うたが、近くの盗人（ぬすと）坂の狸の仕業とも言うた。

盗人坂は追分の村端れだった。どうしてそんな名をつけたか知らぬが、村を出離れて北山御料林の、暗い森の中へ入ろうとする入口で、今は道路改修で坂はなくなったが、以前は崖に沿った険阻な坂で、かつて馬方が落ちて死んだこともあったりして、狸が出なくても充分淋しい処だった。日暮れにそこを通ると、きっと狸が出て悪さをするとする。村の某の男だった。暮方通りかかると、まだ人顔の判る時刻であったが、道の真ん中に大男が立っていて、それがどっちへ廻っても通れぬように邪魔をする。たいていのものなら怖れて遁げたのだが、血気盛んの剛胆ものだけに、こいつと言いながら、力任せに胸元を突き退けた。すると男の姿は消えてしまって、何かかたりと音がして倒れたものがあった。気が付いて脚下を見ると、鍬が一挺倒れていたと言う。大方誰かが置き忘れたものだろうが、それを狸が利用して人間に見せたものだと言う。

これはその坂がなくなって後の、明治四〇年頃の話である。追分の某が、他所村へ田植の手伝いに行った帰りに、その手前まで来ると、何処から出たか一人の怪しい影が先に立って行く、変なことだと思っていると、木立を出離れる処で立ち止まって動かなくなった。某も少し気味が悪くなって、そこに止まってじっと様子を見ていると、その怪しい影がだんだん山の方へ寄って行って、最後に崖へはりついてしまった。それでやっと歩き出したが、傍を通る時見ると、もうその姿はなくなって何か黒いものが、気のせいか見えたと言う。まだ人顔の判るめそめそ刻だったそうである。その時すぐ後ろからやって来たものがあったので、きいて見たが、そのものは一向気がつかなんだと答えたそうである。もちろんこの話は狸とも何とも言うわけではなかった。

盗人坂の狸は、特に狩人が撃ち殺してしまって、今はもう出ぬとも言うた。その狩人が、煮て喰ったが、古狸で肉がこわくて、さっぱりうまくなかったと言う。

肉がこわくてうまくなかったとは、古狸を退治した話に、かならずついて廻る文句だった。どこそこの狸を撃って煮て喰ったが、おそろしく肉がこわかったなどと、よく言うたものである。